

「日々の理科」(第 4434 号) 2026, -9, 30

「秋の北極圏旅行記 (16)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka



線路はフィヨルドの海面よりはるか上に敷かれています。窓を開けて望むと、なかなかの迫力です。



湖に見えますがこれでも海です。「山の中に海がある地形」それがフィヨルドの特徴です。



(2003 年夏撮影／ショーメンフィヨルド)

フィヨルドの底から見ると、氷河がつくった「U 字谷」の底に海水が入り込んだ地形と実感できます。



道をフィヨルドを湾奥までたどると、大変な遠回りになります。そこで、フィヨルドの入口（湾口）には大きな橋がかかっています。このつり橋は最近完成したもので、これでフィヨルドをまたぐ南北の交通は、劇的に改善されました。



終点のナルビク駅に到着しました。結局 1 時間 30 分遅れのままでしたが、乗客に文句を言う人は誰もいませんでした。お詫びのアナウンスもなかったです。3 分遅れれば「列車が遅れて、大変申し訳ございません」と言う、日本の車掌さんとは大違いです。



クリーム色のなつかしいナルビク駅舎です。改札口というものはなく、どこからでもホームに入れます。



ルーレオ始発の 98 列車は、本来ナルビク着 12:36、折り返しの 99 列車は 14:35 発で、ナルビクで約 2 時間の観光ができる予定でした。その間に、駅から徒歩 15 分ほどの港や、徒歩 5 分ほどの街の中心部で昼食をとる予定でした。しかし、列車の遅れでたった 35 分しかありません。

これだけ遅れたのだから、折り返しのナルビク発も少しは「遅くなると期待した」のですが、掲示を見ると、何と定時出発！ナルビクでは「なるびく」ゆっくりしたかったので、非常に残念でした・・・。



仕方なく、駅からの風景だけ楽しむことにしました。フィヨルドの街らしい、急峻な地形の街です。



折り返しの為に、機回し（機関車を先頭に付け替える作業）があると思っていました。しかし、この列車、客車の前後に機関車がついていて、どちらの方向にも運転可能になっていました。



折り返し列車は、スウェーデンのルーレオ行です。ルーレオというのはボスニア湾沿いの大きな街です。



折り返し列車の到着を待ちかねた乗客が、列をつくっていました。全指定席なので別に並ばなくてもいいやと思い、ホームをウロウロしていたら、鉄道員が近寄って来て、「は～い、あの列車乗るの～？乗るんなら切符拝見～」と言ってきました。どうやら車内検札省略のため、駅で改札をしているようです。



超速車内清掃が終わって、出発 15 分前には乗車が始まりました。超短時間滞在でしたが、ま、いいか！